


**特別公開** 5月16日(火)まで  
**「国宝・彦根屏風」**  
 近世初期風俗画の傑作、国宝・彦根屏風を特別公開します。

5月19日(金)~6月20日(火)  
**「煎茶—文雅清遊のいとなみ—」**



赤絵金彩唐人人物図 (からしんぶつず) 煎茶碗 鳴鳳 (めいほう) 絵付

煎茶とは、茶の葉を煎(せん)じて飲む茶で、抹茶とは異なる自由な作法や道具立てに特色があり、江戸時代中期以降、文雅清遊を愛する文人(ぶんじん)達を中心に大いに流行しました。当館所蔵の急須(きゅうす)や煎茶碗(せんちやわん)、水注(すいちゅう)など、煎茶道具の優品を紹介しします。

ギャラリートーク  
 5月20日(土) 11:00~11:30、14:00~14:30  
 ※事前申込:不要 場所:展示室1

観覧料が必要

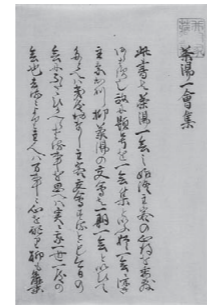
**常設展示の名品**

— 常設展示の名品 —  
 常設展示「ほんものとの出会い」では、譜代大名筆頭・井伊家に伝来した名宝を中心に80点あまりを展示しています。

## 「ほんものとの出会い」

5月19日(金)~7月25日(火)  
**「茶湯一会集」**  
**井伊直弼筆**

大名茶人として知られる井伊直弼の茶の湯思想の集大成となる著作。「一期一会」の語はここから世に広がりました。



5月の休館日はありません。5月16日(火)~同18日(木)は展示替えのため一部閉室しています。

## 文化プラザだより

チケットのお申し込み、お問い合わせは  
**チケットセンター ☎27-5200 (9:00~19:00)**  
 インターネットでも購入いただけます。 <http://bunpla.jp/>

6月10日(土) 13:00 グランドホール  
**よしもとお笑いライブ in ひこね 2017**

出演: COWCOW、テンダラー、ファミリーレストラン、モンスターエンジン、吉田たち、吉本新喜劇(すっちゃん、桑原和男、酒井藍 ほか)

【発売中】  
 一般 4,000円  
 友の会 3,800円  
 ※当日一律4,500円。  
 ※5歳以上有料。4歳以下は膝上のみ無料。お席が必要な場合は有料。



8月26日(土) 17:00 グランドホール  
**劇団四季ミュージカル アンデルセン**

「親指姫」「人魚姫」「みにくいアヒルの子」「はだかの王様」などを生み出した、デンマークの世界的な童話作家ハンス・クリスチャン・アンデルセンが主人公のミュージカル。

アンデルセンが「物語の王様」と呼ばれるまでになった青春の日々を、音楽とクラシックバレエで彩ります。

撮影: 上原タカシ (写真はこれまでの公演より)

【5月27日(土)9:00予約開始】  
 一般: SS席 8,640円 S席 6,400円 A席 5,400円  
 高齢者・障害者・学生: SS席 8,100円 S席 6,100円 A席 5,100円

【5月21日(日)9:00予約開始】  
 友の会: SS席 7,600円 S席 5,800円 A席 4,900円  
 ※未就学児は入場いただけません。  
 ※託児サービスがあります。

チケット発売情報

7月25日(火) 13:30/16:10 グランドホール  
**しまじろうコンサート 「しまじろうと もりのきかんしゃ」**

【チケットセンター 5月20日(土)9:00予約開始】  
 ひこね市文化プラザ特別前売価格 2,280円

【友の会 5月13日(土)9:00予約開始】  
 ひこね市文化プラザ特別前売価格 2,280円  
 ※当日一律2,400円。  
 ※3歳以上有料。2歳以下は保護者1人につき子ども1人まで膝上無料。お席が必要な場合は有料。

チケット販売について

【各公演 発売初日の予約の取り扱い】  
 ※電話予約・インターネット予約のみの受付となります。  
 ※窓口でのチケット引き取り・販売は**翌開館日**から承ります。

5月の休館日 1日(月)、8日(月)、15日(月)、22日(月)、29日(月)

◎表記のチケット価格は、すべて税込価格です。  
 ◎高齢者は65歳以上です。高齢者・障害者・学生のチケットはひこね市文化プラザチケットセンター窓口のみの販売です。  
 ◎託児は、未就学児1人1,000円です。公演の10日前までにお申し込みください。

## 中国渡来の煎茶道具 — 粉彩山水図紫泥水注 —

# ときの玉手箱

博物館からのメッセージ



煎茶とは、葉茶を湯で煎じ出して飲む茶です。現代人がよく飲む茶の一つであり、日常生活の中で、大変親しみ深い存在といえます。

そもそも煎茶は、江戸時代初期に中国・明から来日し、のちに日本の黄檗宗の祖となる隠元隆琦(1592~1673)によつて伝えられたとされています。その後、売茶翁をはじめとする黄檗僧によつて広められました。

その広まりの中で、煎茶を淹れてふるまうという行為は、千利休をはじめとする茶人たちが大成した抹茶を点ててふるまう行為である「茶道」の影響を受け、いっそうの洗練をみることとなります。そして、江戸時代中頃には「煎茶道」が成立し、以後、日本の伝統的な芸道の一つとなりました。

日本にもたらされた当初、煎茶は、中国の最先端の文化として、憧れをもって受け入れられたのでしよう。世俗を離れて詩を詠んだり書画を制作したり、文雅な遊びを楽しむ

ことを理想とした文人達を中心に、江戸時代中頃以降、大いに流行することになりました。その流行は大名家にも及び、井伊家十二代直亮や十三代直弼も、煎茶を嗜んだことが知られています。

煎茶は、抹茶とは異なる自由な作法や道具立てに特色があります。その道具は、抹茶と比較すると全体に小ぶりで、種類も独自のものが多く見られます。中で火を起す涼炉や、湯を沸かす湯瓶、茶葉に湯を注いで茶を淹れる急須、茶葉を入れておく茶心壺、清浄な水を入れる水注、使った水を流し入れる建水、炭を入れる烏府、これらを収納する器局や、茶碗を載せる盆なども用意されました。煎茶道では、単に茶を入れてその味を楽しむだけでなく、これらのさまざまな道具の形態の美しさや、取り合わせの妙を愛でるといことも重要視されました。



▲粉彩山水図紫泥水注

煎茶道具では、特に中国製のものが多い。井伊家伝来の煎茶道具でも、中国渡来の作品が多くを占めています。例えば、写真の作品もその一つ。中国清代に、江蘇省南部の宜興窯で制作された煎茶用の水注です。釉薬をかけずに焼き締めた「紫泥」と呼ばれる陶器で、模様の作風から、清時代の嘉慶年間(1796~1820)頃に制作されたと考えられます。

紫泥は、表面の肌理が細かく、長く使い込むほどに艶が出て、美的な価値が高まるとされてきました。宜興窯の名産で、北宋時代から焼かれていたが、明時代後半頃に、煎茶の道具として紫泥急須が脚光を浴び、「宜興の紫泥」として、煎茶に親

しむ文人たちの愛用品の代表として知られるようになりました。

紫泥の作品は、地肌の風合いを生かしたシンプルな意匠のものが多くありますが、この水注は、凝った形態に特色があります。鈕は蛙をかたどり、注口と把手に竹節の形をあしらった、胴部には、ピンクや薄緑などの白味を帯びた鮮やかな色釉で絵付けする粉彩という技法で、山水が描きこまれています。見所の多い、華やかな作品です。

水注は、清浄な水を注ぐ器として尊ばれ、煎茶席においては、その姿の美しさで、客人の注目を集める存在とされてきました。この水注は、その役割を十分に果たすことのできる魅力的な優品といえるでしょう。

(彦根城博物館学芸員 奥田晶子)

写真の作品は、「テーマ展「煎茶—文雅清遊のいとなみ—」」で、5月19日(金)~6月20日(火)まで展示します。(期間中無休)